神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

In the face of the mind's winter : a reading of George Herbert's 'The forerunners' and Wallace Stevens' 'The plain sense of things'

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2008-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西川, 健誠
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/545

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

想像力の冬を前にして

——George Herbert, ‘The Forerunners’ と Wallace Stevens, ‘The Plain Sense of Things’ ——

西　川　健　誠

Four seasons fill the measure of the year;
Four seasons are there in the mind of man.
[.....]
He hath his winter too of pale misfeature,
Or else he would forget his mortal nature.
—*John Keats, ‘Four seasons fill the measure of the year’*

I

不可知論者であることを標榜する20世紀の詩人とキリスト教の信仰を表明している17世紀の詩人とを比較することは，文学史の常識に逆らうことであろう。とはいえ信仰の有無に関係なく詩人にとり生きることと書くことは不可分である以上，自らの想像力の限界を意識させられる瞬間はその詩人にとり危機の瞬間であろう。

ではこの危機に詩人はどう対応するのであろうか。この危機にどう対処する——或いは対処し損なう——のであろうか。信仰の有無が対処の仕方に違いを生むか，生まないか。本小論ではジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）の「先触れたち」（‘The Forerunners’）とウォレス・スティーヴンズ（Wallace Stevens, 1879-1955）の「事物のありのままの感覚」（‘The Plain Sense of Things’）とを比較しながら，これらの問題について考えて見たい。信仰の有無に関わらずいずれの詩人も「想像力の終わり」を

現実として受け止めるべき必要と，にもかかわらず抱き続ける想像力への拘りとの間で揺れる心情を表明しているのだ。そこで以下の頁においては，スティーヴンズの読者に，超越神に取ってかわるものとして人間の想像力を称揚する詩人が，その想像力の有限性を無視はしていなかったことを提示したく思う。かつハーバートの読者には，自我――創作者としての自我をも含む――を創造者たる神の前に差し出すことを自らの課題にした宗教詩人が，この世のものの美しさと美しい言葉に対する感受性を持ち続けていたことを提示したい。

II

議論に入る前に二つの詩の原文とその内容の要約を付しておこう。

The Forerunners　　George Herbert

The harbingers are come. See, see, their mark;
White is their colour, and behold my head.
But must they have my brain? must they dispark
Those sparkling notions, which therein were bred?
　Must dullness turn me to a clod?
Yet have they left me, *Thou art still my God.*

Good men ye be, to leave me my best room,
Ev'n all my heart, and what is lodged there:
I pass not, I, what of the rest become,
So *Thou art still my God*, be out of fear.
　He will be pleased with that ditty;
And if I please him, I write fine and witty.

Farewell sweet phrases, lovely metaphors.
But will ye leave me thus? when ye before
Of stews and brothels only knew the doors,

Then did I wash you with my tears, and more,
    Brought you to Church well dressed and clad:
My God must have my best, ev'n all I had.

Lovely enchanting language, sugar-cane.
Honey of roses, whither wilt thou fly?
Hath some fond lover 'ticed thee to thy bane?
And wilt thou leave the Church and love a sty?
    Fie, thou wilt soil thy 'broidered coat,
And hurt thyself, and him that sings the note.

Let foolish lovers, if they will love dung,
With canvas, not with arras clothe their shame:
Let folly speak in her own native tongue.
True beauty dwells on high: ours is a flame
    But borrowed thence to light us thither.
Beauty and beauteous words should go together.

Yet if you go, I pass not; take your way:
For, *Thou art still my God,* is all that ye
Perhaps with more embellishment can say.
Go birds of spring: let winter have his fee,
    Let a bleak paleness chalk the door,
So all within be livelier than before.

The Plain Sense of Things　　Wallace Stevens

After the leaves have fallen, we return
To a plain sense of things. It is as if
We had come to an end of the imagination,
Inanimate in an inert savoir.

It is difficult to choose the adjective

For this blank cold, this sadness without cause.
The great structure has become a minor house.
No turban walks across the lessened floors.

The greenhouse never so badly needed paint.
The chimney is fifty years old and slants to one side.
A fantastic effort has failed, a repetition
In a repetitiousness of men and flies.

Yet the absence of the imagination had
Itself to be imagined. The great pond,
The plain sense of it, without reflections, leaves,
Mud, water like dirty glass, expressing silence

Of a sort, silence of a rat come out to see,
The great pond and its waste of the lilies, all this
Had to be imagined as an inevitable knowledge,
Required, as a necessity requires.

ハーバートの「先触れたち」は忍び寄る老いと老いがもたらす想像力の不活発に対する詩人の動揺から始まる。老齢の証である白髪が，国王一行の先発隊（'harbingers'。これが詩のタイトルの意味でもある）が宿として徴用する家の扉につける白墨での印に擬えられている。死が王であり老いがその先発隊というわけである。老いにより精神の，それも詩人としての想像力の活発さを奪われ，詩を書くための生き生きとしたアイディアを失くすことを嘆きつつも，詩人はこれを信仰者としての犠牲の行為として捉え「あなたは変わらずわが神」（'Thou art still my God'）とだけ語ることが出来ればそれでよい，と自らを説き伏せるように言う（第一連，第二連）。とはいえ詩人として，かれが練り上げてきた表現や技法についての思い入れは深い。自らの頭から消え去ろうとする表現や技法に別れを告げながら，その実離れ去っていく想像力の成果を引き止めようとする（第三連，第四連，第五連）。興味

深いのは引き止めるにあたり，詩人――特に宗教詩人としての――自負が前面に出ていることだ。自分が神に捧げるための言葉として清めることがなければ，お前たちは世俗の詩人に用いられ続けられ穢れていたままであろう，その恩を忘れたか，という論法が用いられ(第三連，第四連)，ハーバートの他の詩――例えば「ヨルダン川(II)」(‘Jordan(II)’) や「真の賛歌」(‘A true Hymn’) など――で克服されたはずの聖俗・天地二分法がはっきりした形で再度持ち出される(第五連)。が，最終的に詩人は過去の詩人としての業績への拘泥を捨て「あなたは変わらずわが神」という句に満足することを選ぶ。そうする根拠はこの放棄と引き換えに得られよう内面の充実である(第六連)。

スティーヴンズの「事物のありのままの感覚」は詩人が眼前の光景の中に「想像力の終わり」(‘an end of the imagination’) を認める所からはじまる。季節は葉も落ち寒さも感じられる晩秋，詩人は，かつては豪壮さを誇っていた屋敷のさびれた姿の前に立つ。その屋敷の住人であったターバンを巻いた異国人の姿は見られず，荒れるに任された温室のペンキは剥げ煙突は片方に傾いている。屋敷が建材を用いた構築物であれば，詩もまた言葉という材料を用いた構築物に喩えられよう。とすればかつては立派だった屋敷のさびれた姿に，詩人が想像力の奮闘の失敗を見てとる (cf. ‘A fantastic effort has failed’) のは当然といえる(第一連～第三連)。が最終的には，詩人はその「失敗」の悲しみになすすべもなく耽溺することを拒み，この「失敗」を必然として受け止めようとする。屋敷に付属する大きな池 (‘the great pond’) も昔日には屋敷の立派さの一部であり，過去にはその水面に花の咲いている姿が映っていたこともあった。だが現在は「汚れたガラスのように」(‘like a dirty glass’) 水は濁り，映るものもなく (‘without reflections’)，朽ちた百合 (‘waste of the lilies’) が浮かぶのみである。外界を「映しだす」(reflect) という共通項により人の想像力と水面とが結びつくとすれば，濁り外のものを映すことができなくなった水面は弱まり混濁した想像力の比喩

といえよう。「映し得なく」なった水面＝想像力を前に，詩人は「映し得た」状態に未練を抱きながらも荒涼たる現実を受け入れる。想像力の去った状態（‘the absence of the imagination’）は，不可避で（‘inevitable’），必然的なものとして（‘as a necessity requires’）してあらかじめ想定されるべきものであった，と自らを納得させるように語るところで，詩は結ばれる（第四連，第五連）。

Ⅲ

いずれも想像力の衰えをテーマにし最終的にはその衰えを受容する，という構造を持ちながらも，両詩の間にはトーンの違いが認められる。ハーバートの詩では，少なからぬセンテンスが疑問文，命令文，時には感嘆文であり詩人は一人称単数で「麗しい語句，美しい比喩」（‘sweet phrases, lovely metaphors’）「うっとりする程愛らしい言葉」（‘lovely enchanting language’）に向かい呼びかける。語り口は個人的であり，自らの想像力が清めた言葉に対する消えない愛着がいささか大袈裟な位に伝わってくる。詩人は声高に世俗の恋愛詩を汚れたものとして難じているが，詩人自身が去り行こうとする想像力を引き止めるために発する言葉は，皮肉にも批判対象としている恋愛詩人の言葉に酷似している。耽溺の対象が美しい女性ではなく，美しい言葉――さらにはその美しい言葉を発した自ら（cf. ‘him that sings the note’）――になっているだけ，といったら厳しすぎであろうか。それ程ハーバートの語り口には芝居がかった，或いは切実な，響きがあるのだ。対するにスティーヴンズの詩の語り口は落ち着いており淡々としている。全ての文が平叙文であり，第一連の，それも至って総称的な複数形の we を除いては，一人称代名詞は登場しない。信仰者であるならば精神の危機にあたっても動じないであろうというのが俗人の一般的な期待だとすれば，皮肉にも信仰者たるハーバートの方が「うろたえて」おり，不可知論を標榜するスティー

ヴンズの方が「悟っている」印象を受ける。

しかしこのトーンの違いにもかかわらず，両詩には興味深い類似点が存在する。ハーバートの詩にもスティーヴンズの詩にも「後戻り」の瞬間――意味の上では想像力の衰えなり放棄なりを語っていながらそれを語る表現が実に巧みで，図らずも詩人の想像力の活発さ，或いは想像力への拘りが伝わってしまうような瞬間――があるのだ。まずは「先触れたち」から例を挙げよう。第二連，詩人は，意匠を凝らした言葉は取りあげられても構わぬので「あなたは変わらずわが神」という言葉だけは残して欲しいと語る。信仰者としては天晴れな発言である。だが問題はそれに続く，原文では 'He will be pleased with that ditty/And if I please him, I write fine and witty' となっている詩行だ。訳せば「『あなたは変わらずわが神』という詩句に神は満足されるだろうし/神が満足されるのであれば私としては機の利いた結構な詩を書いたことになる」となり，聖書に出てくるすでに決まった表現でも神はそれを嘉する以上私はそれで満足であるという，素朴な言葉に甘んずる決意を伝えた詩行と文字上では解せるだろう。だが witty/ditty という押韻はいかにも耳につく。witty と ditty が rhyme words として結び付けられていることで，文字の上では「機知」を「詩句」から放棄すると記されていても，耳が依然詩人の中にひそむ「機知」ある「詩句」への拘りを聞き取ってしまうのである。スタンリー・フィッシュ (Stanley Fish) の「はなはだしく witty な wit の拒絶」というコメントは誠に適切であろう。[1]

同種の瞬間が「事物のありのままの感覚」の中にも見つけられる。第一連で詩人は「想像力の終り」を迎えた状態を「機転の鈍る中，活気を失って」と形容している。原文では 'inanimate in an inert savoir' という箇所だ。これは視覚的にも聴覚的にも際立った表現ではなかろうか。視覚的には否定の接頭語を含む形容詞が近接して用いられ (*in*animate, *in*ert)，音声的にも滑らかに音読するのが難しい鼻音が連続して並ぶ (iN-aN-i-Mate-iN-aN-iN-ert-savoir)。想像力が不活発な状態を目にも耳にも伝えるための技巧であ

ろうが，技巧として余りに目立ち（或いは耳につき）かえって読者は詩人の想像力の働きを感じてしまわないか。この詩全体を一種の creative uncreativity を体現したものとアントニー・ワイティング（Anthony Whiting）は評しているが，[2] その評がまさに当てはまる箇所である。才気の衰えを語ったはずの言葉が，至って詩人の才気，ないしは才気への拘りを感じさせる言葉になっているのだ。

想像力の終わりを語りながら想像力を手放せない心情が最もはっきり現われるのは，おのおのの詩の結びである。どちらの詩人も「とはいえ」（Yet）という言葉を境に，悲しみを振り切って想像力の喪失を受け入れる決意を示す。だがその決意を示す行間からはなお残る想像力への未練が聞えてくるのだ。ハーバートは言う。「とはいえお前たちが去るというのなら，構わない。そうするがよい。さらなる装飾を凝らした所で口に出来るのは恐らく『あなたは変わらずわが神』という句のみだから」と（'Yet if ye go, I pass not. Take your way./For, *Thou art still my God*, is all that ye/Perhaps with more embellishment can say'）。ここで問題になるのは perhaps という副詞である。「恐らく」という訳語からは伝わりにくいが，perhaps の本来の意味は「そうかもしれないけれど，そうでないかもしれない」という不確定の意味である。さらにいえば "I'm sure we can make it." "Perhaps, but it will not be easy"という文例が示すように，提示された意見をやんわりと否定する用法さえ持つ。[3] とすれば上の文においても「どんなに装飾を凝らしても『あなたはわが神』以上の言葉は出ない」という否定の意味は perhaps によって弱められていることになろう。すなわち「『あなたは変わらずわが神』という言葉以上の言葉も出せるのに」という詩人の想像力への未練が，間接的にとはいえ表明された言い方になるのである。「perhaps という一語にどれほどの留保の気持ちが含まれていることか」というルイ・マーツ（Louis Martz）の評ももっともだ。[4] 自らの想像力と想像力が生んだ「美しい言葉」とを老いという現実の前に手離そうとしながらも，詩人として，

特に宗教詩人として，自らが清めた言葉を手離すのはやはり辛い。その辛さが perhaps という副詞一語に込められているのである。それでも詩人は気丈に「去るがよい, 春の鳥たちよ，冬にその取り分をとらせよ」（‘Go birds of spring: let winter have his fee’）と言葉を続けて勢い盛んであった頃の表現やアイディアが去ることを許し，「私の内面が以前よりも活気づくように」（‘So all within be livelier than before’）という祈願で詩を結んでいる。額面通りに取れば引き換えに安息が与えられることを信じて，老いを神への奉献・犠牲として受け止めようとする言葉であるが，先ほどの perhaps のニュアンスを頭におくと，ある種の苦さ・寂しさも聞き取れてしまう。自分で自分を無理やり納得させるための言葉のように響くのだ。神の定めとは謂え「精神の冬」を受け入れるのは信仰者にとっても難しい事，というべきか。

スティーヴンズの場合はどうだろう。より抑制された形でではあるが，ハーバートの詩行から感じられたのと同種の躊躇がかれの詩行からも感じられる。第四連冒頭「とはいえ」（yet）という逆接の接続詞が置かれた後，「想像力がなくなる状態それ自体が，想像されねばならなかった」（‘the absence of imagination had/Itself to be imagined’）という想像力の衰えを現実として認める趣旨の文がまずは来る。だが目を引くのはこれに続く連を跨いだ計53語からなる長い文である。この文では，まず「立派な池」（‘the great pond’）が主語として置かれたかと思うと次行で「そのありのままの感覚」（‘the plain sense of it’）と言い換えられ，続けて３行半にわたり朽ちて濁った池の中にあるものや池の状態を指す語句が断片的に列挙される。その後，「立派な池」（‘the greal pond’）が今度は「そこに浮かぶ朽ちた百合」（‘its waste of the lilies’）と and で結び付けられて再登場し，これら列挙・並列された語句を全てまとめる形で「これら全て」（‘all this’）が最終的な主語となった末，結びから二行目でようやく「想像されねばならなかった」（‘had to be imagined’）という述部が置かれる構造になっている。この複

雑な文の構造に詩人の気持ちの揺れが反映されていないか。[5] いささか晦渋になるが説明すればこういうことだ。第一。前に触れた通りこの詩においては，咲く花をはじめとする美しきものを表面に映しだす「池」が外界の美を想像力により映しとる人間の精神の象徴になっている。とすればこの「池」が濁ることは，精神の混濁すること，想像力が弱まって外界の美を映しえなくなることをも語っていよう。この点を踏まえて「ありのままの感覚」（或いは「そこに浮かぶ朽ちた百合」）と「立派な池」の間で主語が揺れているという文法的事実に注目すると，それは，前者――すなわち想像力が衰えて最早精神が外界の美を受け止められない状態――を簡単には受け止められず，後者――つまり想像力が活発であった状態――との間で心が揺れていること，もっといえば後者の状態に詩人がノスタルジアを抱いていることの反映と理解出来ないか。第二。二回登場する「立派な池」の間に挟まれている語句からも同種のノスタルジアが窺える。「映るものはなく」（‘without reflections’）という表現は「（映るものが）ある」状態を，「汚れたガラスのような水面」（‘water like dirty glass’）という表現は「澄んだガラス（のような水面）」を対照的に意識してはじめて登場し得る表現であろう。とすればこれもまた詩人が，水面＝精神が「澄んで」そこに外界のものが「映し出される」状態を忘れられずにいる証といえないか。[6] 第三。「……想像されねばならなかった」という述部が詩の結びから２行目まで遅延されていること自体も，詩人の気持ちの体現であろう。映るものがある池＝現実の美を映し出し得る活き活きとした精神の状態に別れを告げるのを，せめて詩行の中では何とかして遅らせたいからこそ，「あらかじめ想像されておかなければいけなかった」という諦念の言葉も遅延されているのではないか。

「雪だるま」（‘The Snowman’）において「人は冬の精神を持たなければいけない」（‘One must have a mind of winter’）と喝破したスティーヴンズはあるが，いざ「精神の冬」の到来が現実になると，それを迎え入れるのは言う程楽なことではないようだ。想像力の退場を「不可避」（‘inevitable’）であ

り「必然が要請する通りに要請されるもの」(‘Required, as a necessity requires’)と悟りながら，殊更にそのことを繰り返す(‘required…requires’; さらには had to be imagined の繰返しにも注目されたい)あたりにも，想像力が去るのをそう簡単には甘んじて受け入れられぬ詩人の心の中が見てとれる。[7] ハーバートの場合よりもより stoic であることに成功しているとはいえ，「先触れたち」の末尾の行間から洩れるのと同種の抵抗が「事物のありのままの感覚」の結びにもやはり認められるのである。

Ⅳ

上で見てきたような差異と共通点を踏まえた上で「想像力の終わり」に対するハーバート，スティーヴンズの態度を考えたい。

まず，信仰者としてある種の悟りが期待されるはずのハーバートが，想像力の喪失という事態を前にして平静を失っていることを，皮肉と考えるべきであろうか？必ずしもそう考える必要はなかろう。なぜならば無限の神への信仰と有限のこの世のものの美を感じ取る感受性は，必ずしも相反するものとは限らず，前者が後者を鋭いものにし，後者が前者をより価値のあるものにし得るからである。無限の存在への信があるからこそ，現世に存在する美しきものの美しさがより実感され，その美しきものを信仰の要請の前に手離すことが一段と切実な――そして切実なゆえに価値のある――行為となると言ってもよいであろう。ハーバート自身が「真珠」(‘The Pearl’) で用いている言葉をここで用いるならば，かれは「甘やかな調べ，その調べのもたらす喜び，安息を味わった」(‘I know…the sweet strains, / The lullings and relishes of it’［第３連］) 上で，神を信仰することを選んだのである。この世のものの魅力を魅力として味わった上でこの世を越える存在への奉献を選んでいるからこそ，その奉献の行為が人を動かすものになるのではないか。さらにいえば「麗しい調べ」(‘sweet strains’)――つまりは詩歌という

この世の美しきもの――への愛を断ち切れないからこそ，神の側から与えられる恩恵――やはり「真珠」の中に登場する印象的な句を用いれば「天から下された絹のより糸」（‘a silk twist let down from heaven’）――が一段と詩人の信仰にとり不可欠なものとなったのであろう。執着が依然残り続けていることを感じさせる詩人の詩行が，逆説的に恩恵の必要を証す神学的な statement になっているのだ。

スティーヴンズの方はどう解すべきだろう。大文字の Creator に替わるものとして小文字の creator に信をおいたとされる彼が「想像力の終わり」を語ることは奇異だろうか。この問いに答える上で「スティーヴンズは概して想像力の大いなる信奉者と目されてきたし，それは間違いではないが，大いなる信奉者となったのは大いなる懐疑を経てのことであった」というスティーヴンズ研究者，ヘレン・レゲイロ（Helen Regueiro）の言葉は示唆に富もう。[8] 論者としてはいささかスティーヴンズを「裏読み」することになるのではという懸念を覚えるのだが，かれの詩の中にある self-consuming な要素に注目したく思う。具体的に言えば，来世を説く伝統的な宗教を揶揄しそれに代わり現世の美しさ・楽しさを重んじるよう勧めるかれの初期の詩においても，同時に現世のもののはかなさを認めるelegiac な調べが聴き取れるのだ。例えば「日曜の朝」（‘Sunday Morning’）を考えてみよう。同詩の第 V 節，この世のものが与えてくれる楽しみに満足ではあるがそれでも何か滅びることがない至福を得たいと語る女性に向かい，詩人は「死こそ美の母なのだ」（‘Death is the mother of beauty’）と託宣のように言い渡した上で，いかに死が世代の交代を可能にし新しい愛を若い男女の間に生むかを指摘する，続けて第Ⅵ節では「死」が排除されるいわゆる「天国」がその変化のなさのゆえにいかに退屈かを，第Ⅶ節では逆にキリスト教を捨てた人間が味わい得る地上の「天国」が，いかに愉楽に満ちたものかを語る。だが同詩を結びの第Ⅷ節まで読んだ際に，読者は地上にある美しきもの・快きものの魅力と同時に，ある種の儚さ・悲しさをも感じないか。同詩末尾の，鳩の群れが翼を

広げながら暗闇に向け下降していくイメージ（'[C]asual flocks of pigeons … sink/Downward to darkness, on extended wings'）が惹起するのは，美しさの感覚と同時に悲しさ・転落の感覚である。この感覚を意識してのことだろう，ジャネット・マッキャン（Janet McCann）は同詩の第Ⅶ節と第Ⅷ節の間にトーンの落差を認め，これを「エネルギーではなくエレジーを取るという詩人の選択」（his choice of elegy over energy）と形容しているのも肯ける。[9] 刹那の美しさ・快感をば尊重せよというのがこの詩における詩人の主張であろうが，その主張を語るための言葉からどこか哀調が感じられてしまうのだ。

また「アイスクリームの皇帝」（'The Emperor of Ice-Cream'）でも同種のことが起きている。同詩の第一連７行目 'Let be be finale of seem' という一文は，一義的には，死者が出たからといってあるかないかわからぬ来世があるように見せかける仰々しい葬儀にエネルギーをかけるかわりに，アイスクリームでも食べながら現世の普段通りの生活を送れ，という意に解される。対照されている be（実質）と seem（かりそめ）におのおの対応するのは現世と来世，という理解である。だが同詩を第二連まで読み進め，やはり７行目に同じくLet から始める 'Let the light affix its beam'（「ライトの光が［老女の遺体に］固定するように」）という命令文に至ると，先程の命令文について別様の理解の可能性も生まれてこないか。今は若くてアイスクリームを堪能しながら群れあっている若い男（'boys'）・若い女（'wenches'）も，いずれは死体として「冷たく」「口もきけなくなった」（'cold and dumb'）老女のようになる。real life といわれる現世の生活が実は永久ではないことを若者たちもいずれは身をもって知ることになろう。とすれば「かりそめ」（seem）なのは「実質的な生活」（real life）と私達が気安く呼ぶ現世の生活であり，死こそが究極の実質（be）なのではないか。信仰者たるハーバートとは異なり死の彼岸にあるとされる世界を実在のものとして be と呼ぶことはないにせよ，此岸の世界に「フィナーレ」――終わり――があるという

意識が，スティーヴンズにもあったように思われる。この「終わり」の意識が人間の想像力にあてはめられれば，「想像力の辞去」「想像力の終わり」という語句が登場するのは自然なことといえないだろうか。

「物事のありのままの感覚」はかれの亡くなる一年前に出された詩集『岩』（*The Rock*）の中に納められているが，同詩集の中には終わり――四季のサイクルの中の終わりとの人生の終わりとがない交ぜにされた形での終り――が語られたものが少なくない。「誇れる者，強き者は/姿を消した。//後に残る者は功なき者，/最終的に人間らしい者/縮小した場の先住民」（'The proud and the strong/Have departed.//Those that are left are the unaccomplished,/The finally human,/Natives of a dwindled place'［「生命叡智遊戯」'Lebensweisheitspielerei'］），「活力を失った夏のことばは，最早何も語らない」（'The effete vocabulary of summer/No longer says anything'［「緑の惑星」'The Green Planet'］）等々。[10]「死は美の母」と死を美と結びつけた時から想像力の終焉＝死はおぼろにではあれ意識されていただろうが，自らの人生の終焉が近づく中，それはよりはっきりとした問題になったのであろう。そのような詩人が言葉に出して「想像力の終わり」を黙想したとすれば，「事物のありのままの感覚」のような詩がスティーヴンズにあるのも納得がいくことだ。

V

いかに陰惨であろうとも，想像力の衰えはどんな詩人であれいずれは直面しなければならない現実であろう。この現実に直面した際の反応を詩にしたものがハーバートの「先触れたち」でありスティーヴンズの「事物のありのままの感覚」である。「先触れたち」においてハーバートは，信仰の要請といえでも想像力を手放すには躊躇があること，また詩人としてその躊躇を綺麗事で済まさぬだけの誠実さをかれが持っていたことを示した。他方スティー

ヴンズは「事物のありのままの感覚」において，人間の想像力を伝統的な宗教にかわるものとしたかれが，想像力の終わり＝有限性を想像することができたことを示した。無限なるものへの信を標榜することが有限のものの持つ魅力を十全に感じ取ることとは矛盾せず，また無限なるものを思考の枠外におくことが有限なるもの――人のことばと想像力を含む――の有限性を意識し続けることを妨げるわけでもない，ということが，おのおのの詩により示されているといえよう。そして何より，ハーバートにおいてもスティーヴンズにおいても，「美しさと美しい言葉」（‘beauty and beauteous words’［‘The Forerunners’］をいずれは手放さなければいけないという現実と，それらに最後まで愛着を持たずにいられないという心情の間のディレンマが，美しい詩を産んでいる。両詩人とも美的な反＝美学の詩を書くことに――図らずも――成功しているのだ。

注

本論文は2008年10月10日，筆者が*George Herbert's Travels: International Print and Cultural Legacies*（於米国州立ノースカロライナ大学グリーンズボロ校）で行った口頭発表（‘Bidding Farewell to Beauty and Beauteous Words: George Herbert's ‘The Forerunners’ and ‘Wallace Stevens’ ‘The Plain Sense of Things’）の元にしたものである。英語原稿から日本語に翻訳し活字にするにあたり，加筆・修正を行った箇所がある。

本論文の内容のうち，ハーバート「先触れたち」に関わる部分は，筆者が『シリーズことばのスペクトル―時間』（東洋学園大学・東洋女子短期大学ことばを考える会編。リーベル出版，1998）に寄稿した「ことばと『御言葉』―ジョージ・ハーバートの宗教詩における時間と永遠」と一部重複する。

キーツの作品の引用は Jack Stillinger, ed., *John Keats: Complete Poems*（Harvard UP. 1978）に，ハーバートの作品の引用は John Tobin, ed., *The Complete English Poems: George Herbert*（Penguin Classics, 1991），スティーヴンズの作品の引用はWallace Stevens, *The Collected Poems*（Vintage Books, 1954）に従った。

1．Stanley Fish, *Self-Consuming Artifacts: The Experience of Seventeenth Century Literature*（1972: Duquesne UP, 1994），218.

2．Anthony Whiting, *The Never-Resting Mind: Wallace Stevens' Romantic Irony*（U of Michigan P, 1996），168.

3．この例文は *Collines COBUILD English Dictionary for Advanced Leamers*（1987: 3rd ed., Harper Collins Publishers, 1995）の ‘perhaps’ の項 4 にある。

4．Louis Martz, *The Poetry of Meditation* (Yale UP, 1954), 314.

5．この箇所の読みについては，ヘレン・ヴェンドラーが米国の大学生用の詩の教科書の中で示している丁寧な読みに負う所が少なくなかった。Helen Vendler, *Poems, Poets, Poetry: An Introduction and Anthology* (1997: 2nd ed, Bedford/St. Martin, 2001, 以下では Vendler[1]と表記), 39-47。ただしヴェンドラーは，「決意」と「未練」の間の揺れを認めつつも，どちらかといえば最終連に「決意」を読み取っているようだ。注７参照。

6．「対照を前提とした表現」から伺われるノスタルジア，についての指摘は，Vendler に負う。Vendler[1], 43

7．この繰り返しについてヴェンドラーは，「(想像力の衰えという現実を）受け入れる覚悟の言葉」と取っている (cf. 'he…shows us how that mind pulls itself up again with its reiterated "had to be imagined (Vendler[1], 43)。だが繰り返さなければいけない程克服されるべきノスタルジアも強い，という読みもあり得るのではないか。ちなみにヴェンドラーにはハーバート論もあり（Helen Vendler, *The Poetry of George Herbert* [Harvard UP, 1975]，以下 Vendler[2] と表記）その中で，「『先触れたち』の奇妙な点は，『春の鳥』たちに別れをつけながら頑固に『刺繍の入った上着』を編み出している点だ」('The odd aspect of *The Forerunners* is its persistent weaving of a "broidered coat" in spite of its farewell to the birds of spring) と，同詩の中の言葉を引きながらハーバートの心中の揺れを指摘している (Vendler[2], 268)。が，同種の揺れは――揺れの抑え方はハーバートより巧みとはいえ――やはりスティーヴンズの詩にも最後まで感じ取れるのではないか。

8．Helen Regueiro, *The Limits of Imagination: Wordsworth, Yeats, Stevens* (Cornell UP, 1976), 147.

9．Janet McCann, *Wallace Stevens Revisited: "The Celestial Possible"* (Twayne Publishers, 1995), 10.

10. これらの詩行についてレゲットは，やはり *The Rock* 所収の長編詩 "The Auroras of Autumn" と共に，「精神の至ることのできない存在の秩序の観念に連なるもの」―― ('lead to the conception of an order of existerce beyond the mind's reach') と記している。「精神の至ることができない」という部分を「想像力によって把握することは出来ない」と読み換えるならば，これらの詩行も 'The Plain Sense of Things' 同様，想像力の限界について語っており，さらに詩人の想像力がその終わりを見据えた種のものであったことを示していよう。B.J.Leggett, *Wallace Stevens and Poetic Theory: Conceiving the Supreme Fiction* (U of North Carolina P, 1987), 198-199.